



TITLE:

愛知縣毛織物工業に於ける金融

AUTHOR(S):

田杉, 競

CITATION:

田杉, 競. 愛知縣毛織物工業に於ける金融. 經濟論叢 1941, 53(6): 685-699

ISSUE DATE:

1941-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/131620>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號六第 卷三十五第

月二十年六十和昭

論叢

支那の二五減租問題……………

經濟學博士 八木芳之助

生産の理論の一節……………

文學博士 高田保馬

ナチス勞働時間保護の原理……………

經濟學士 中川與之助

獨占的競争企業とその規模……………

經濟學士 大塚一朗

普通銀行の金融機構に於ける機能とその統制……………

經濟學博士 小島昌太郎

時論

長期總力體制の確立と「いへ」の論理……………

經濟學博士 石川興二

研究

愛知縣毛織物工業における金融……………

經濟學士 田杉競

テニルゴの精神進歩の理論……………

經濟學士 出口勇藏

說苑

支那の工業合作運動について……………

經濟學士 菊田太郎

附錄

外國雜誌論題

本誌第五十三卷總目錄

研究

愛知縣毛織物工業に於ける金融

田 杉 競

一 序

中小工業の金融が多く問屋及び個人金融業者によつて與へられて來た事は周知の如くであるが、この場合に工業者は金融關係を通じて高利を負担し、問屋からは製品價格又は工賃を切り下げられて、經營上の困難を招くことが少なくない。かゝる弊害を除くために國家は銀行及び工業組合の活動を促進せんとしたけれども、この政策は必ずしも容易に成功しなかつた。之には種種なる原因があるけれども、その一は中小工業者の無自覺とその信用薄弱にあり、しかもこれらの點は、金融機關の側からも過大に考へられてゐた。即ち中小工業者も銀行以外の金融機關に依頼し、銀行もまた危険なる投資を避けんとしたわけである。然し乍ら中小工業が漸次規模を擴大するに伴ひ、工業者の資本が蓄積せられ、かつ企業者の能力が向上し、かくて經營の合理化に對して目覺めるならば、問屋の支配を脱して金融機關に依頼することが多くなる筈である。勿論、このとき金融機關の側に於ても態度の變更が必要である。支那事變以來種々なる事情によつて、中小工業者の金融状態が變化したことは他の機會に一言したが、その以前に於て既に問屋金融より獨立し、銀行より相當額の融資をうけてゐた、比較的顯著な一例とし愛知縣毛織物工業をとり上げ、變化のあとを辿ることとする。

二 毛織物工業の發展

愛知縣毛織物工業における金融

第五十三卷 六八五 第六號 八九

1) 掲稿、統制組織と問屋金融(本誌第51卷第3號)、中小工業統制組織の金融問題(本誌第52卷第4號)。

毛織物工業が始め大工業として出發し、中小工業の發展が比較的最近の事に屬するのは、全くの輸入産業であり、複雑な技術を要するがためであるにもせよ、他の織物工業に比して特異なる點である。又中小毛織物工業が愛知縣において綿織物並に絹綿交織物よりの轉換として興つたことは、多くの人絹織物工業が絹織物よりの轉換として發達したこととともに、一つの特徴をなす。これらの事實は何よりも毛織物に對する需要が始め軍絨及びモスリンに限られ、ついでサーヂの國產化、殊に着尺セルの發展となり、歐洲大戰後に至り生活慣習の變化に伴ひ洋服地に對する國內市場が開けたこと、ついで昭和七、八年以來輸出市場が擴大したといふ、市場的事情に因るものであらう。

いま毛織物工業の發達¹⁾を詳述することを避け、金融事情の研究に必要な限りに對して一瞥したい。明治十二年千住製絨所に發端した日本毛織物工業は日清戰爭において莫大な軍絨注文を得ると共に、明治二十九年羊毛輸入關稅の撤廢、及び三十九年毛絲及び毛織物關稅の引上といふ好條件を與へられ、技術の複雑なるラシヤ、毛布等よりもまづモスリンの生産が擴大した。而してモスリンは無地物として一貫作業を行ふから、大資本を要し最初から大工業として發達した。日露戰爭もこの工業に大なる刺激を與へ、この頃モスリン生産は輸入を凌駕するに至るが、毛織物工業の本格的發達を促したものは第一次歐洲大戰に外ならぬ。蓋し大戰はわが工業全體に好況を齎したこと勿論であるが、漸く原料毛絲の國產化も着手され、サーヂの國產化、即ち着尺セルも試織期を脱してゐた際であるから、たとひ大戰中こそ原毛、トップ及び機械類の輸入杜絶のためさして大なる發展をしなかつたとしても、戦後の好況が羊毛工業の著しき發展を促したことは云ふ迄もなく、しかもこの時見逃すべからざる重大事は生活水準の向上、特に生活様式の歐風化であつた。先づモスリン生産の増大とならんで着尺セルが、大

1) 毛織物工業の歴史については梅浦健吉、羊毛工業、並に小出保治、本邦毛織物工業の生産機構(毛織、昭和15年9月號より現在まで連載)に詳しい。小論の敘述も主としてこれに負ふ。なほ井口東輔、最近に於ける中小毛織物工業事情(社會政策時報、第172、173號、昭和10年1、2月)、酒井正三郎、我國羊毛工

正五、六年より飛躍的發展を遂げ、ついで洋服地サーヂ、ランシャ等が生産増加を示した。²⁾ 着尺セルが二幅織機を以て織られ、且つ柄物であるため小規模生産に適し、又洋服地においても柄物は勿論、無地物でも低廉なる需要に對しては小規模生産の進出する餘地あるため、他纖維織物の中小工業がこの領域に進出して、こゝに毛織物における大企業と中小企業との併存が現れて來たのである。爾來いくばくもなくモスリンが、稍おくれて着尺セルが飽和状態に達したが、洋服地サーヂ及びランシャは著しき發達を示し、かくて大工業によつて構成される日本羊毛工業會所屬の工場に比して、主として中小工業による愛知縣工場の生産額割合は増大の一路を辿り、昭和十二年に後者は全生産額に對し九割(サーヂ)乃至四割(ランシャ)に達した。³⁾

かくの如く急速な發達を示した愛知縣毛織物工業は主として中小工場より成り、今日では全國毛織物工業に對して機業場數にて七一・四%、職工數にて四四・八%(昭和十二年)にして第一位を占めるのみならず、兵庫縣、東京府の如き大工場の支配的な府縣を除いて見れば、中小毛織物工業に對して占める地位は殆ど壓倒的なことを知る。かくの如き愛知縣の毛織物工業は最初綿織物及び絹綿交織物より轉換せるもので、早く力織機をとり入れた遠州綿織物に壓迫されたこの地の機業者が、より高級な技術を毛織物に應用したところに發生した。輸入サーヂにヒントを得て之を着尺製品に應用せんとした試みは明治二十年代より行はれ、三十四年一應の完成を見たといはれるが、その商品化は恰も綿及び絹綿交織物の轉換に迫られつゝあつた四十年代であつて、大正五、六年以來は飛躍的發展を遂げた。かくて愛知縣の毛織物は主として着尺セルに始まる。

着尺セルの發展に續くのは洋服地(サーヂ及びランシャ類)であり、やがて着尺セルが飽和状態に達したに反し、洋服の普及に伴つて大正末期よりこの方面に努力が注がれ、織機は四幅の國産力織機が製造され、また同時に原料

業の現勢と特に中小毛織工業問題(同誌、第175號、昭和10年4月)參照。

2) 紙幅の關係上統計をすべて省略した。前掲書並に論文參照。

3) 小出保治、前掲論文、4月號、5月號。

4) 尾西織物史、99頁以下。

毛絲の國產化も實現せられ、これらは染色整理部門の技術的進歩が行はれた事と相俟つて尾西毛織物の發展期を生むに至つた。市場の擴大はもとより、毛絲と織機の國產化は毛織物工業の生産機構を擴大し變化すること著しいものがあつた。即ち一方には賃機が増加が顯著となり、他方に小機業者が漸次規模を擴大して問屋支配より脱却せんとする傾向が現はれ始めたのである。また地域的にも一宮を中心とする中島郡より廣汎な地方に經營が展開し、従つて中島郡では既に發達せる着尺セルに加へて服地を兼織するもの比較的多く、服地においても柄物を多く扱ふに反し、津島を中心とする海部郡は無地サーヂを特色とする分化を示して來た。

昭和五、六年までに洋服地を中心として發展した事情はその後も變らないが、七年より後はわが低爲替による輸出の伸張がこの地の中小毛織物工業に更に飛躍的な發展を促したもので、海外新市場の獲得が産業及び經營の規模に對して與へた影響を最も端的に示す。同時に軍事費撒布、低爲替による各種産業の一般的好況によつて、國內需要も全般的に増大した。従つてまた賃織經營の發生はこの期に最も多い。たゞかくの如き中小經營の激増の反面には、同じ事情に促進されて從來よりの機業者がその規模を増大して、技術と經濟的地位とを向上せしめたこと、並びにかゝる中小工場が依然として大工場と製品の分野を異にしてゐることは注意せられねばならぬ。毛織物の領域で大なる割合を占める中小工場も純毛織物、特に高級品においては大工場に壓倒されてゐる。愛知縣製品は國內需要層も大衆であるし、進出した海外市場も低價格を以て開拓し得たアジア、アフリカの如き文化程度の低い地方であつた事實は之と相照應する。賃機は農民を始め各社會層から發生し、毛織物市場の擴大に伴つて資本を蓄積し得て漸次に獨立工場へと成長する。勿論成長の途中に種々の障害、殊に中小企業としての規模の限界に達して破綻するものが少くないが、市場の擴大するだけ、一方に分業化せる中小企業の存立餘地が増

すと同時に、また他方に國內市場と國外市場とを目的とした擴大せる企業が成立し得るはずである。前者は全く間屋、殊に産地間屋の支配下に動かされ、後者は或る程度まで間屋の支配を脱して獨立工場としての色彩を濃くし、直接に集散地間屋——東西間屋と交渉するといふ意味で、兩種の企業は質的に全く異なる内容をもつてゐる。

支那事變勃發までの毛織物工業の沿革は以上の如く概括し得る。愛知縣におけるかくの如き産業及び企業の機構の上に中小工業金融は如何なる展開を示したであらうか。いま敘述の便宜から、大正初年から十三、四年頃までを第一期とし、大正末期より昭和五、六年までの發展期を第二期とし、その後の輸出伸展時代を第三期と分つて各時期に特徴的な金融方法を檢ねることとする。⁶⁾

三 毛織物工業の金融

第一期（輸入毛絲、着尺セル時代） 愛知縣毛織物工業の最初の展開は着尺セルにおいて見られ、手機モスリンが之に加はる。毛織物においては日本全體として明治四十年に力織機が手織機を凌駕してゐるに拘らず、愛知縣において着尺セルが主として織られた第一期にはなほ手織機が支配的であつた。複雑な技術を應用するこの地の綿織物及び絹綿交織物が力織機導入を躊躇させたのであるが、このため競争生産地より受けた打撃を機械化による代りに、毛織物への轉換によつて回避したのであつて、たゞ他纖維を用ひる新しき技術は最初のうち、稍規模の太なる、いはゞ中工場にて實施されたやうである。農商務省統計によれば毛織物は主として職工十人以上を用ひる「工場」にて製織され、平均職工數三四十人に達してゐた事實は注意されなければならぬ。²⁾ 然し着尺セルの著しき發展を示した大正五、六年以來は工場のほか、零細經營、殊に賃織業も増加し始め、大正十年頃に至れば、マニ

6) 各時期に特徴的な展開を述べるが、これらの金融方法は同時に殆どすべて最近まで行はれてゐる。蓋し若干機業者の規模が大きくなると同時に、常に新しき零細企業が發生しつつあるから。
1) 小出保治、前掲論文、12月號。

ユフアクチュアとして多少の獨立性を保つ「内機」と、他方に賃機とが成立してゐた。

次に金融問題の考察に當つて少からぬ意義を有するのは原料毛絲である。着尺セルに用ひられる毛絲の生産は毛織物生産よりもおくれ、一般にトツプを輸入して内地で紡績することさへ日露戦争後のことであり、第一次歐洲大戰中に輸入杜絶して國產毛絲に對する刺戟が與へられたが、なほ當時まで主として輸入毛絲が使用されてゐた。かくて原料毛絲買付は輸入商より之を行ふわけであつた。

毛織物は他の織物に比して製織技術が複雑であり、製織期間も長く、絲仕入より織上り迄少くとも二三ヶ月、染色整理に一ヶ月を要するのみならず、殊に着尺セルは需要期が限られるため、作業及び資金需要の季節的繁閑が甚しいといふ特徴がある。また原料絲は綿絲、人絹絲等に比して高價である。これらの事情から必然的に多くの經營資本を必要とするわけであり、彼等が金融上原料商あるひは問屋に依存せざるを得なくなる所以である。

第一期における問屋金融の狀況は詳細を知り難いが、賃機に於ては產地問屋が強力に之を支配してゐたこと、從つて金融も問屋によつて賄はれてゐたことは殆ど疑ひない。產地問屋は最も零細なる機屋に對しては自ら毛絲を輸入商より買付け、之を機屋に支給して織上げしめた製品を引取り、之に工賃を支拂ふ。勿論、製織期間が長い場合中途において必要な資金は問屋に仰ぐであらう。然しこの場合でも愛知縣では織機は概ね機屋の所有に屬するやうである。やゝ資力ある機屋に對しては、先金を渡すが原絲は機屋自身をして買入れしめ、製品を引取る、所謂「糸賣竊買」の形式をとる。この場合に毛絲は主として需要期に輸入商が出張して產地問屋又は機屋に賣るのであるから、輸入商は直接生産者へ深き關係を持ち得ず、從つて經營への干渉、金融的援助を與へなかつたに反し、產地問屋は資金又は原料の形において機業者に對する金融を行ひ、後者は全く問屋の支配下にある。

- 2) 小田保治、昭和16年1月號。恐らく當初複雑な技術を利用して轉換を取へてしたのは、綿又は絹綿交織物にて或る程度の發展を遂げたものに限られたのであらう。
- 3) 最近整理設備の不足その他のため更に延長して5-6ヶ月を要する。

金融のみならず、意匠の考案も生産の計畫もすべて問屋の命するまゝである。これはながく中小工業に一般的な經營方法であり、金融方法であつて、今日なほ零細なる規模の工業者については多く見られる。大阪東京の集散地問屋、所謂東西問屋に對しては產地問屋を通じて供給される。

獨立工場、即ち内機は前記統計に現はれたほどに支配的であつたか、また内機と呼ばれる機屋がどこまで問屋より獨立してゐたか、多少の疑問がある。このうち稍大なるもの、例へば職工三四十人以上を使用せる工場の如きは別として、それ以下の規模をもつ工場は恐らく内機とは名のみ、「糸賣竊買」の形にて實質的には問屋に依存してゐたと考へられ、その限りでは獨立性少きこと賃機とさして異らぬと見るべきであらう。

以上の如き場合、金融機關の對象となるのは全く問屋のみに限られ、機屋は間接に問屋を通じて資金を得る。また機屋は全く從屬的地位にあるから、問屋よりの融通に對しては高利を負擔し、また工資の著しき切下げが行はれたことは當然であり、いまは業者も認めるところである。

第二期(國產毛絲、機業發展時代) 大正末年より原料毛絲の國產化がすみ、この地方でも生産されることゝなつた。毛絲は大正十一、二年頃より漸次生産額を増し、従つてまた輸入は十四、五年より殆ど連年減少して行つた。大正十五年の關稅改正の効果も見逃すことが出来ない。而してこれより毛絲商が發展して、產地問屋又は機業者に金融的活動をも行ふことゝなつた。

この期はひきつゞく着尺セルの黄金時代に加へて服地生産が開始された時である。着尺セルを以て習得したる毛織技術を四幅服地に應用して改良に努めると同時に、四幅力織機の導入が盛んに行はれ、大正十三年には愛知縣に於ても漸く力織機が手織機を凌駕することゝなつた。織機十臺未滿の零細經營に於てさへ昭和二年には力織

機の方が多くなつた。注意すべきは力織機の國産化が平岩式、大隈式、豊田式、野上式等の出現によつて行はれて、容易に織機増設が可能となつたのみならず、これら織機製造業者が競つて製品を賣込むために月賦販賣方法を取り、機業者は固定資金を一時にそなへずして増設を行ふことが出來た。勿論好況期には設備資金の一部が問屋より賄はれることもあつたに相違ない。

染色整理部門の技術的進歩も少からぬ意義をもつが、これら生産條件の改善にもまして根本的なのは毛織物需要の著しき増大にほかならぬ。洋服着用の習慣が普及するに伴つて、着尺セルのほかに洋服地生産が發展した結果、兩者を兼織する業者の如きはその規模を相當に擴大した。機業者が一般に資力を増大するに至れば、獨立性を大にし、金融關係においても次に述べる如き變化を生ずる。既に地方的集中を示した毛織物生産によつて漸次に熟練工が増加し、かゝる勞働力が養成せられつゝある農村の地盤の上に擴大せる市場が得られるならば、既存企業の規模が擴大するとともに、新しき小企業が絶えず成立することは當然であつて、これが零細貸機の大量的發生となつた。かくて我々はこゝに機業者の經濟的地位の向上と賃機的發展との兩現象を見出したのである。

零細なる賃機に對する産地問屋の金融的支配は前期と異なるところはない。然るに機業者のうちには上述の如くその資力と規模とを増大したものが現れ、從來の如き産地問屋への絶對的從屬に甘んぜず、今や意匠を自ら考案し、自ら市況の見透しに基いて生産の計畫を樹立する能力を得るし、市場の狀況によつては有利な販賣先を選択せんとさへするに至る。こゝで毛絲商と織物商とを兼ねる産地問屋の支配から脱れて、或る程度までの自由を留保し得る取引経路がつくられるのである。

恰も原料毛絲は國産化された。毛絲商は産地の小規模な毛絲商のほか、東京の三井物産株式會社、大阪の丸紅

1) 井口東輔、最近に於ける中小毛織物工業事情(社會政策時報、昭和10年1月、2月號)。氏は服地兼織により生産設備が高度に利用され、機業者の經營狀態が改善された點を指摘される。

商店、伊藤忠商事株式會社（今の三興株式會社）、安宅商會の各支店、或は名古屋の遠山商店等が、問屋と比較的大なる機業者に毛絲を賣る。毛絲商は概ね大資本を擁するし、毛絲の取引關係が定常化すれば機屋の經營内容を知悉するから、多くの絲を賣り込むために手形によつて供給する途を開く。即ち（一）六十日乃至九十日期限の手形をとつて絲を賣り、或は（二）入用な數量だけ絲を渡し毎月分を現金拂させる延拂の方法をとることもある。手形は毛絲商において期日まで保持し、或は銀行にて割引される。産地（二宮、津島などの毛絲商に對しても同様な金融が行はれた。これらの場合金利は毛絲代の中に含まれ、危險に對する保險料の分だけ通常の銀行日歩よりも高いのが普通であつた。

毛織物においては設備資金の必要はさして大きくないが、毛絲が高いだけ原絲代に對する金融が重大となるばかりでなく、又製織整理期間が四、五ヶ月に及ぶため、その間工賃、電力料、租税等のための流動資金を要し、かつ季節的繁閑あり、着尺セルにては春秋物多く、洋服地にては夏物は一——三月頃、冬物は六——八月頃に出荷多く（殊には冬物は原料はじめ生産費が大である）、その時まで資力の許す限り製品を手持してゐるから、流動資金には少なからぬものが必要となる。然しいふまでもなく機屋がすべて所有するに及ばず、實際は毛絲商、問屋、銀行等の資力によつて賄はれる部分が少くない。原絲金融のほか所謂「織溜金融」が行はれるわけである。

織溜金融についてこの頃は主として織物商（有力なる買繰商、又は東西問屋）が之に當つた。即ち取引關係の定まつた機屋に對しては製品納入を引當として内金を前貸するのであり、多くは織物商が六十日乃至九十日期限の手形を振出して機屋に與へ、機屋は之を銀行にて割引く。銀行は織物商の信用にて割引き、之によつて機屋が直接には問屋より、間接には銀行より金融をうけたことになる。内金であり、商品の取引は未だ行はれてゐないか

ら、一種の融通手形にほかならぬ。出荷時期の關係から六——八月頃に最も多いが、早く振出されたものは切換へられて續く。また織物市況の良好なる際には織物商は商品を取りたい爲めに進んでこの金融を與へんとしたこともある。

やゝ信用ある機業者は仕入れた原絲を擔保とし、即ち倉庫證券によつて銀行より融通をうけることもある。前貸手形と稱するが、銀行が物的擔保により機業者に直接金融する、かくの如き方法もやがて現はれて來た。

織溜金融においても、たとひ問屋の信用によつて受けるにせよ、間接には銀行の融資をうけ、更には物的擔保にて直接銀行より融資をうけるに至れば機屋の地位は多少向上したわけであるが、一層明瞭にこの事を示すのは製品代金の決済方法における變化である。即ち從來の産地問屋に従屬してゐる間は、機屋は東西問屋との連絡に全く無關心であつた。けれども、機屋が漸次強力になるに従ひ、或は自ら商業的活動を行ひ、或はより弱き問屋を自己の有利なやうに利用せんと努めるに至る。³⁾ 愛知縣毛織物工業においては買繼商、エゼントの如き問屋を利用するものが多く、産地問屋又は東西問屋の番頭が獨立して營業するのを利用して、之に東西問屋との仲介を行はせるのである。(從來からの産地問屋も屢々買繼商と呼ばれるが、こゝには産地問屋に比して資力少く、仲介的活動を主とするものを指す名稱として用ひる。) 彼等は資力なほ弱小であるから機屋の製品に對しては十日期日の小切手を以て賣買價格の凡そ八割を支拂ひ、五日毎に開かれる次の市日に東西問屋に渡して六十日又は九十日の商業手形を受取る。この手形を銀行に持參して割引を受け、以て前記小切手を決済する。買繼商が現金にて買取り「現金二歩引」にて支拂ふといふのは實はこの十日期限小切手拂のことであつた。買繼商は通常二%の手數料を得、今やコムミツシヨンマーチャントたる色彩が強い。この場合買繼商は自己の決済資金は大體東西問屋の信用によつて手形割引

3) 他の一例として、柳川昇、桐生織物業に於ける前貸制度(經濟學論集、第2巻第2號)參照。

4) 約二割に當る殘額は舊正月(冬物)舊盆(春夏物)まで仕切りを留保される。

をうけた銀行の資金にまつわけであり、數萬圓の資力を以て各自年二百萬圓位の取引を行ひ、自らも多少の資力と信用とはもつが、主として東西問屋と銀行の力によつて立つてゐたのであるから、東西問屋に對しては勿論、機業者に對しても強大なる自主性をもたず、製品價格も東西問屋に於て始めて決定され、買繼商は原則として手數料のみを取得するに過ぎない。たゞこの時といへども價格下落による危険は之を機屋に轉嫁する事が出来る。この方法による銀行の手形割引の月末殘高が多きときは百萬圓にも達したことは、そのまゝ之を利用した機業者の經濟的地位の向上を物語るものと言はなければならぬ。

エゼントと稱するのは買繼商に似てゐるが、一層自主性少く、機屋より東西問屋への仲介に當つて「商標料」一%を取得し、問屋より手形を貰つて來るに過ぎない。⁵⁾

我々は以上の如き變化から第一に、機業者が賃機として、原料と製品との兩側より支配されてゐた状態より脱して、毛絲商と織物商とに別々に金融を依存するに至つた點に於て、第二に、產地問屋を離れて買繼商の如き弱小問屋を利用するに至つた點に於て、機業者の經濟的地位の向上を認めることが出来る。また銀行はこれら商業者に金融することによつて間接に機業資金を供給し、手形貸付及び手形割引の方法を盛んに用ひたことは一つの特色である。

東西問屋が同時に毛絲商を兼ねる場合も少くない。この場合には毛絲商が同時に織溜資金の融通も行ふわけであるが、かゝる毛絲商はいふ迄もなく大資本であるから、之から融通をうけるのは既に機屋が相當の規模に達してゐる場合に限られる。

第三期（輸出伸張時代） 昭和七、八年より我が低爲替を利して海外市場に進出した中小工業の一例として毛織物

5) このほか持下り問屋なるものがあり、主として小機業者を支配して製品を地方小賣商或は百貨店に直接賣り、厚口錢をとつてゐたが、最近減少した。

工業をあげることが出来る。市場は關東州、中華民國、英領印度等の東洋諸國から漸次アフリカにも及んだ。確かに品質においてはなほ英國品に遙かに及ばず、中級品以下の獨伊製品に伍して、價格の點で漸くこれら未開國市場に進出したものではあるけれども、數量的には誠に目覺しい進出であつた。内地需要の増大と併んでかくの如き海外市場の擴大が毛織物工業に興へた刺激はいふ迄もなく極めて大きく、愛知縣の中小毛織工場は一段と飛躍的發展を遂げた。毛絲もこの期間には輸出超過を示すに至り、毛絲製造専門會社も發展した。製品は着尺セルが稍衰微に入り、中心は洋服地に置かれ、從來の製品のほか婦人子供服地の生産が著しく増加した。力織機の普及や經營規模の擴大の如き傾向は前期より引き續くものであつたが、此の地方では輸出毛織物と内需毛織物とは多く兼織せられてゐる事も注意すべきである。²⁾

この時期にも毛織物工業の産業規模の擴大に伴つて賃織の顯著な増加が見られ、全賃織工場のうち昭和六年以降に成立したものがその半數に達してゐる(昭和十年調査³⁾)。賃機の大部分が如何に新しいかを知り得るが、この事實は毛織物工業の發展の急激なることを示すにほかならず、賃織形態はかなり早くより徐々に起つてはゐたものの、大企業に對して中小企業の占める意義を急速に高めることゝなつた。他方において中小企業のうちその規模を擴大し勢力を得るに至つたものが少くないことは、またこの期における金融方法にも現はれてゐる。賃機その他の中小企業が産地問屋又は獨立機業者に從屬して之より金融を受ける方法は前の時期と異ならないから、經濟的地位を向上したため新しき金融方法を利用するに至つた場合について述べる。

まづ機業者は毛絲商の金融をうけてゐたけれども、之に對する金利負擔は毛絲代金の中に含まれることはいふ迄もなく、しかもこの金利は銀行のそれより若干高いのが常であつた。それ故(一)機業者にして資本を蓄積すれ

1) 小出保治、毛織物工業の輸出伸張力(時局と中小工業Ⅱ)、232頁以下。
2) 小出保治、同書、219頁。
3) 小出保治、前掲論文、2月號。
4) 當時銀行日歩は2.5~1.5錢であつた。昭和7年より漸次低落を續けた。

ば現金拂をなすに至ることは當然である。この場合には毛絲商より五、六日期限を附した素爲替手形、即ち引受なき逆爲替を取組み、機業者は着荷により現金支拂をなすのである。金利負擔は之により低下するし、銀行は商業手形として之を割引く。(二)また機業者は絲價の變動甚しく販路の擴大が見込まれる際において積極的に原絲仕入を行ふことは當然であり、原絲手當資金を銀行に仰ぐことがあつた。たゞ銀行も昭和五、六年までは明治銀行と地元銀行とを除き、投機的傾向を極端に嫌ひ、かゝる融通をあまり與へなかつたが、輸出伸張期に入つては銀行も積極的な態度に變じて、直接機業者にかゝる金融をなすに至つた。機業者は不動産を擔保として融通をうけ又は原絲を倉庫に寄託し、倉庫證券を以て融通をうけ、資力以上に買付けた絲代の決済に用ひた。(尤もかゝる融資が投機のために流用されたこともあつたやうである。)これらの事實から原絲金融に於て、嘗て毛絲商に融通してゐた銀行が、直接機業者の信用に對して融通するやうになつた事を注意しなければならぬ。

次に原絲手當以外に要する運轉資金、殊に織溜資金について、從來は問屋より受けてゐたことが多かつたに對して、こゝでも今や銀行から直接金融をうけるやうになつた。機屋に資力が出來て、又經濟的にも技術的にもさして問屋に依存する必要がなくなれば、問屋金融が高利その他の種々な負擔を伴ふことを自覺するから、この方法による金融を避けて銀行に資金を求めるに至る。しかもこの時銀行さへ積極的に貸出に應ずるならば、銀行金融は問屋金融に代り得る。之を實現したのが愛知縣中小機業者と名古屋附近の主要銀行であつた。

銀行は手形貸付の形において織溜資金を與へる。これに擔保貸と無擔保貸とあり、擔保貸は有價證券、不動産等を擔保とすることもあるが、多くは原絲擔保、事實上は倉庫證券を擔保とする上記の貸付であつて、前貸手形と呼ばれる。仕入原絲の六、七割まで貸出され、六十日期限のものが多かつた。無擔保貸、即ち信用貸が行はれ

- 5) 大貿易業者は屢々毛絲商を兼ね、この時は手形による絲販賣により産地問屋、又は機屋に金融を與へることがある。

るのは更に一層信用ある機業者に限られ、事變前に業者の一、二割位がかかる形式の融資の対象たり得たといはれる。これは即ち單名手形である。

毛織物は整理完了まで長期間を要するが故に、例へば整理中の織物につき金融することは當然に考へられ、一部問屋によつてはかなり早くから實現されてゐたが、住友銀行がかゝる半製品金融——生機金融キバタを行つたのはこの頃である。銀行は特約せる整理工場の倉庫に出張員を派し、一々入出庫を検せしめ、倉庫料と火災保険料カとを別に機業者に負擔せしめたから、主として手續上の不便のため、暫くにして中止された。また銀行の行ふ場合には市況の不分明、擔保品處分の困難などのため、問屋に比して少額しか貸出し得ないといふ事情があつた。

製品の流通に伴ふ金融はさきに見たる形とさして異らぬ。たゞ買繼商を経由する場合にも機業者の獨立性が一層強くなつただけ、彼等は益々仲介的業務に局限されざるを得ない。東西問屋が直接機業者を支配して之を伏機とし手形による前貸を與へることが多くなつたことも、産地問屋及び買繼商の地位の弱화를物語るものに外ならぬ。たゞ後者が絶えず新に成立する貸機を支配してゐることは變らず、また昭和十二、三年以來は直輸出を行ふことを始めた。

四 結 論

以上、原絲手當資金、織溜資金及び製品流通信用の何れにおいても、機業者に對する銀行の直接融資が漸次顯著となつて來たことを知るのであるが、之は昭和十一年頃から殊に明らかに見られる。而してこの傾向は機業者の資本蓄積と進歩的態度とに基くことは言ふ迄もないが、一面また銀行の態度の變化によることも疑ひない。元

- 6) 小島昌太郎、丹後縮緬工業に於ける金融（綿業時報昭和15年1月號參照）。一宮の或る問屋にてこの種の貸金残高が月平均100萬圓に上つてゐた。
- 7) 問屋では火災保険料を金利の中に含め、銀行日歩1.6錢位のとき、日歩2—2.2錢位とつてゐた。

來銀行は中小工業者を危険視して融通を與へないものであるが、こゝでは始め一宮、津島等における地元銀行のほか、名古屋の本店銀行として明治銀行が早くから相當額の貸出を行つて、毛織物金融の分野を開拓しつゝあつたし、他方原料毛絲が輸入されてゐた時代から外國爲替業務を営む正金銀行、三井銀行、住友銀行、第一銀行等の支店銀行が毛織物に關係してゐた。明治銀行は昭和七年三月破綻したためその開拓した分野は他の銀行に引受けられることとなり、また機業者も銀行を選ぶに當り、昭和七、八年頃までは一宮の地方金利と名古屋の金利とに日歩一―二厘の差があつたことに注目して名古屋の本店銀行と取引を始めるに至つた。昭和八年頃よりは一般に低金利の趨勢¹⁾が進行し、金融緩慢の状態を續けたから、銀行が、貸出に積極的態度をとつた事は當然でもあるが、多くの中小工業がなほこの頃銀行金融を受けてゐなかつたことを思へば、銀行のうち毛織物工業の實情を深く調査のうへ積極的貸出に努めたもの、例へば住友銀行の如き、そのイニシアティヴは見逃すことを得ない。これら銀行は金融的援助を通じて愛知縣毛織物工業の發展の一翼を荷つたものといふべきであらう。

之を要するに愛知縣毛織物工業における金融は、手形金融が盛んであつて、問屋金融から銀行の直接機業者への金融に進んだ典型的一例であつて、一方に中小工業者の資本蓄積と進歩的資本主義的精神と他方に銀行の積極的態度が相俟つてこの結果を生んだものと見ることが出来る。

1) 例へば名古屋市手形貸付日歩を見るに昭和7年最高2.5錢、最低1.5錢から昭和12年最高1.7錢、最低1.1錢に低下した(名古屋經濟統計月報による)。